

2018/04/08

「信仰とは何？」

■信仰とは

「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」

(ヘブル 11:1)

「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」

(ヘブル 11:6)

「信仰とは、目に見えないものを信じること」という定義に立つと、人との約束を信じたり、電車が来ると信じたりすることも信仰です。つまり、誰もが信仰を持っているのです。しかし、「まだ見ていないものを信じる」とは、信仰の一面にすぎません。

聖書はさらに、「信仰」とは、「神に近づくこと」だと語ります。つまり、誰もが信仰を持っているということは、自分で気づいていないだけで、人は皆、神に近づこうとしているということです。なぜでしょうか。それは、私たちの魂は生まれながらに神を知っており、神との関わりが素晴らしいものであることを知っているからです。もし神を知らなければ、神に近づこうとすることはあり得ません。生まれながらに神を知っているということ、このことを、神に捕らえられていると表現することができます。なぜ、人は神に捕らえられているのか、それは、人が神に似せて造られた存在だからです。

「そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。」(創世記 1:26)

「その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。」(創世記 2:7)

三位一体の神は、互いに支え合い、一つとなる関係です。このような関係を愛と言います。人が、神に似せて造られたということは、人の本質は愛だということです。そのため、人は、神と一つになろうとし、人と一つになろうとするのです。神は、私たちを知っており、私たちが神に近づこうとしています。信仰とは、このように、神に結びつこうとする運動のことです。

すべての人が神に結びつこうとしているというのに、なぜ皆がクリスチャンになるわけで

はないのでしょうか。

そもそも、人間は、神と一つだったのですが、悪魔によって、その関係が壊されました。悪魔は、人に、神と異なる思いを持ち込み、騙されたエバは、神様が食べてはいけないと言った実を食べてしまったのです。神と異なる思いを持つということは、神と一つではなくなったということです。この時、神と一つであるという信頼関係が壊れてしまったのです。これが、悪魔がもたらした罪なのです。

神との結びつきを失った状態が、死という状態です。人間は、神との結びつきを失って朽ちるものとなり、同時にこの地も朽ちて滅びるものとなりました。神様ご自身は、滅びることができないので、この世界に存在することができなくなりました。こうして、人は神を見ることができなくなりました。

神との関わりを失った人間は、まず自分は裸だということに気づきました。今まで神と一つだった時には、自分の姿など意識しないで済んだのですが、神と離れ、自分には何もないと気づいた人間は、神の代用となるものを探して生きるようになりました。神を見失い、神を求める運動だけが残ったのです。こうして信仰の迷走が始まりました。

■信仰の迷走

「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」

(I コリント 13:12-13)

人は、神のいのちで造られているので、神を見失ったとはいっても、ぼんやりと神のことがわかっています。神は自由であり、永遠なるお方です。そのため、神を求める運動は、自由を求め、人は言葉を使ってその自由を手に入れました。

この地上には様々な制約がありますが、言葉の上ではすべてが自由です。人が言葉を持っているということ、それは、神にとらえられていることを表しているのです。私たちの中に、制約されない神のいのちがあるということなのです。ヨハネの福音書は、「言葉は神であった」と語りますが、言葉は制約されない自由であり、神を表すものです。私たちは神を知っているがゆえに、自由を求めているのです。

しかし、自由を求めた結果、人は自分の可能性を追求するようになりました。自らの可能性の中に平安を求めるようになったわけですが、可能性を追求すればするほど、絶望するという問題にぶつかります。限りなく自由な神と、人間には隔たりがありすぎるからです。

例えば、私たちの魂は永遠を知っているのに、少しでも長く生きようとしますが、科学が進歩した結果、延ばすことができた寿命は、100歳ほどです。言葉の世界では永遠を語っても、現実には、永遠なる神とは無限の隔たりがあります。その結果、どんなに自由を求めて

も、心が休まらないという壁にぶつかってしまうのです。自分が考える自由がそこにはないからです。

しかし、この絶望こそが素晴らしいチャンスになります。神は私たちを見捨てず、その絶望を取り除こうと、常に御手を差し出して、私たちに働きかけておられるからです。神は、人が無条件に従うロボットであることを望まず、人間に意志をお与えになりました。ですから、人が同意しないことを無理にすることはなさいません。そこで、神は、私たちに呼びかけ、願いを起こさせ、実現に至らせようとなさいます。そのために、私にしがみつきなさいと御手を伸ばし続けておられるのです。

私たちの魂は神のいのちで造られているので、神の声が聞こえます。しかし、自らの可能性を追求している時には、目に見えない神を拒んできました。つまり、自らの可能性を神とし、偶像礼拝をしていたのです。ところが、絶望することによって、意志は魂に語りかけられる神の声に耳を傾けるようになり、神の御手をつかむようになるのです。これが救われるということです。これは、人には意識できない領域で魂と神の間で行われるやりとりです。

神の声に耳を傾け、神に心を向けると、神との結びつきが回復し、信仰が再び神の方向に軌道修正されます。救われることを、信仰を頂くとも表現しますが、それは、新たな信仰をもらうということではなく、信仰の向かう先が真の神に軌道修正されたということなのです。

絶望は、素晴らしいチャンスです。神のいない世界で、人はさまざまなものを使って、絶望を回避しようとしませんが、それは愚かなことです。酒や娯楽によるストレス発散も、人の慰めを求めることも、反抗、快楽、達成感などで心に刺激を与えることも、つらさから身を守ろうとする行為です。絶望を回避するために、死を選択する人もいます。

しかし、絶望を回避しようとしてはいけません。神はあなたが絶望するのを待っておられます。それは、魂に響く声に耳を傾けることができる、素晴らしいチャンスなのです。絶望するような出来事を、患難と呼びますが、聖書は「患難を喜べ」と教えています。それは、イエス・キリストを信じることができるようになるチャンスだからです。

クリスチャンになるということは、魂に響く神の声に耳を傾けることができ、信仰の進む先が真の神へと回復したということです。ついに私たちの信仰は、真の神、イエス・キリストに向かうことができました。しかし、これまで様々なものを神として生きてきたために、神に向かおうとすると、自分の中にそれを邪魔するものがたくさんあることに気づきます。それが罪です。今、私たちの信仰は、罪と戦いながら、神に近づこうとしているのです。

■あなたの本質

人の本質は神と一つとなろうとする愛であり、その愛があるがゆえに、人は神と結びつこうとする信仰を持っています。誰もが愛を持っていて、神に結びつこうとする信仰を持っています。たとえ罪によって神との関わりを失っても、そういう良きものである本質は変わりません。神は、神に似せて人を造り、「非常に良い」と言われました。それがあなたです。この事実は不変です。

「そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった。こうして夕があり、朝があった。第六日。」(創世記 1:31)

人間は、神との結びつきを失い、自分の可能性を神とするようになりました。その結果、人と争って、自分の可能性を誇り、相手を排除するようになり、愛せなくなり、絶望から逃れようとして快楽をむさぼるようになり、罪を犯すようになり、自分はダメだと思うようになったのです。自分の可能性を神とすることが、偶像礼拝であり、その罪があなたを苦しめているのです。

人は自分を見て、自分には愛がないと言いますが、そうではなく、罪によって愛が神ではないものに向かうようになっただけです。そもそも人は神と一つになろうとする愛を持っていますが、その神が見えないために、自分の可能性を神としてそこに向かうようになっただけです。信仰がないのではなく、信仰が正しい方向に向かっていないのです。

福音とは、誤った方向に向かっているものを、正しい方向に向くようにするものです。神と離れて生きるようになった人間は、生まれながらに悪いことしか考えなくなってしまいました。神は人を滅ぼすことも、裁くこともなさいませんが、なぜなら、人が良きものであることに変わりはないからです。ただ、それが今は方向を見失ったせいで正しく機能しなくなっただけだと神は知っておられるのです。

「主は、そのなだめのかおりをかがれ、主は心の中でこう仰せられた。「わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことはすまい。人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。わたしは、決して再び、わたしがしたように、すべての生き物を打ち滅ぼすことはすまい。」(創世記 8:21)

これが神の永遠の契約です。人の思い計ることは初めから悪だから、滅ぼすことも裁くことも、神にとっては無意味です。イエス様は、「どんな罪を犯しても私はあなたを裁かない。私はあなたを救うために来た。」と繰り返し言われました。神にとって、罪は病気であり、私たちは病人です。イエス様は、「あなたには医者が必要だから、私はあなたのところに来たのだ」と言われます。私たちは、自分は悪いことばかりするダメなものだと思うかもしれませんが、それは、信仰が正しい方向に向いていないだけで、もともと良きものなのです。ただし、その信仰が正しい方向に向くためには、リハビリが必要です。これが、良きものから良きものになるということです。

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」(Ⅱコリント 3:18)

私たちは神を映す鏡です。つまり、誰もが神に似せて造られた良きものです。ダメなもの

が良くなるのではなく、良きものの信仰が正しい方向に機能するように、私たちは神によって変えられていくのです。

人は、神と同じ姿に造られた素晴らしい存在です。それなのに、私たちは、「自分はダメだ」「あの人はダメだ」と裁いてばかりいないでしょうか。御霊なる主の働きによって変えられていくと、互いに裁き合うような愚かなことはなくなり、互いに愛が正しい方向に向くよう助け合うようになります。

信仰とは、私たちの本質であり、私たちのしてきたことのすべては、神に近づこうとする運動だったのです。見えないものを信じ、可能性を信じ、偶像礼拝をしてきたのは、イエス様を信じたいという願望そのものだったということです。

私たちは、誰もが神に愛されており、神の愛から逃れることはできません。神抜きで可能性を追求しても、平安はありません。私たちは神を求めるようにしか造られていないからです。イエス様は、ただわたしの手を握りしめよと、手を差し伸べてくださっています。それがすべてです。私たちのすることは、真の神に心を向けるだけであり、そうすれば、信仰が正しい方向に進み、私たちは平安を手にしていくことができるようになります。